

は し が き

本書シリーズは、新形式のTOEFLをはじめとする各種検定試験対策用に編集された教材です。「リスニング編」「リーディング編」の2冊に分けられ、それぞれが計20回のテストで構成されています。いずれもTOEFL形式の演習問題を通して、リスニング力・読解力の養成を要領よく行えるよう工夫してあります。

ところで、コンピュータによるTOEFL (Computer-Based TOEFL, 以下CBTと略す) が導入されることになり、戸惑っているTOEFL受験者も多いのではないのでしょうか。しかし、筆記道具がコンピュータに代わったことにより、より受験し易くなったというのが現状です。詳しくは後の「CBTについて」の項目で説明しますが、ここで簡単に触れておきましょう。

これまでのTOEFLを含むペーパーテストの多くは、Norm-Referenced Test 相対評価テストでした。実力の有無に関わらず、同一の問題を、同じ試験時間で解答していたのです。そしてスコアも偏差値式に変換し、受験者をランク付けしたのです。しかし、このCBTはこのような点を改善し、TOEFL受験生の実力に応じた問題を解答していくことにより、より正確に英語力を測定するものです。

すなわち、CBTの特徴は、なんと言ってもコンピュータの特色をフルに活かしたものとなっていることです。まず、リスニングですが、受験生の正答率から次の問題の難易度を調節して出題するのが特色です。また、文法は極端に減り、ライティングの評価と総合して判定するようになっていきます。リーディングは受験者の実力に相当する問題文が出題されますが、正答率に関係なく設問が出されます。

内容的には、リスニングでは、大学の講義調のものが圧倒的に増えたことです。とくに、日常的な会話やシチュエーションになれていた人にはアカデミックな講義は慣れるのに時間がかかるかもしれません。しかし、TOEFLが留学を前提とするテストである以上、他のテストとの違いが出てきて当然でしょう。

では、対策を考えるときにどうすれば良いのでしょうか。コンピュータの操作に慣れるのは実際の試験でも説明がありますし、そう時間がかかるものではありません。むしろ、本当の実力を養成することが重要です。

ややもすると、資格試験を対象とする対策本があまりにもテクニックだけを強調しています。しかし、TOEFLで問題となるのは入学に関してもそうですが、その後英語による授業をこなせるかどうかの点も無視できません。しかも、リスニングなどの点では、日本人はテクニックだけで処理できるほどのレベルに達していないのが現状です。これは英語で授業を受けることが少ないという点も影響していますが、いずれにしても、実力をじっくりと養成していくことを目指さなければ、効果は期待できないでしょう。

本書を本当の実力養成にフルに活用してほしいと思います。最後に、大学生を対象として、いち早く本書を企画立案された金星堂編集部の嶋田和成氏と構成などで大変お世話になった比企めぐみ氏にこの場を借りて感謝します。また、資料編集にあたり、国際テスト研究センター研究員の平本直美氏と資格英語演習等で授業を熱心に聞いてくれた学生諸氏に感謝します。

CBTについて 新しいTOEFLの概要

CBT (Computer-Based TOEFL)とはコンピュータ受験のTOEFLです。これまでのTOEFLの試験をただコンピュータ上で行うだけではありません。コンピュータの利点を活かした双方向型テストだと言えます。下にテスト構成を示した表をあげましたのでご覧ください。

リスニング問題	Part A 短い会話文 (問題数11~17題 質問1題) Part B 長い会話(問題数2~3題, 質問各2~3題), 講義(問題数4~6題, 質問各3~6題) 制限時間40~60分,(解答時間15~20分)
文法・語法問題	空所補充問題, 下線部間違い探し (問題数20~25題) 制限時間15~20分
リーディング問題	250~350語前後の長文 (問題数4~5題, 設問各4題程度) 制限時間70分~90分

途中で休憩がリーディングの前に入りますが、ライティングまで入れると最長4時間近くにもなり、体力、集中力、緊張感の持続力が必要でしょう。CBTの特徴の概略を説明しておきましょう。

問題数が受験者によって異なりますが、それは各セクションの数で、全体的には問題数に違いは出てきません。また、各自がヘッドホンを着用しボリュームを各自が調整するので、以前のようにスピーカーとの位置関係や聴覚の差異に関係なくなりました。リスニングは前の問題の正答率から受験生のレベルを判定し受験生のリスニング力に合わせた(tailored)問題が出されます。ただ、正答率から判断するので問題をスキップ出来ません。では、やさしい問題を解けるように最初の問題からわざと間違えることを考える人がいるかもしれませんが、それは無理です。なぜならスコアは「問題数」、「正答率」、「問題の難易度」、を総合して出されるのです。

文法問題も同じように受験生のレベルに合った問題となりますが、空所補充と下線部の間違い探しが順不同で出されるので戸惑うかもしれません。これも、後戻りも、スキップも出来ません。

長文問題は受験生のレベルとは関係なく、出題されます。このため、読みなおして問題の後戻りも、スキップも出来るので他のペーパーテストと同じだと考えてかまいません。

では次にそれぞれのセクションの特徴を見ておきましょう。[注1]

(1) リスニング

- 利点**
- 選択肢が現れる前に質問を読み、聴ける
 - 受験者のレベルに合った問題
 - 受験者のペースで進める
 - 各自のヘッドホーンで音量調節ができる

- 注意点**
- 問題のスキップ，後戻りができない
 - 従来の選択肢から1つ選ぶのに加え，2つ選ぶ場合，視覚イメージの選択，並べ替えも含まれるので柔軟な姿勢が必要

(2) 文法・語法

- 利点**
- 問題数が少ない
 - 受験者のレベルに合った問題
- 注意点**
- 空所補充と間違い探しがランダムに出題されるので頭の切り替えが必要

(3) リーディング

- 利点**
- 44～60問を70～90分で解答する
 - 問題のスキップ，後戻りができる
- 注意点**
- 従来の選択肢形式に加え，単語，フレーズ，センテンスをクリックしたり，文を適切な個所に挿入する問題が含まれるので注意

従来型のペーパーTOEFLとCBTのスコアの相関表を挙げておきましょう。[注2]

ペーパーTOEFL	CBT	概要
640～677	273～300	大学院は十分
600～637	250～270	大学院レベル，学部は十分
560～597	220～247	学部レベル，大学院によっては可能
500～557	173～220	学部ボーダーライン
450～497	133～170	コミュニティカレッジボーダーライン
447以下	130以下	留学準備段階

大体の目安は以上ようになります。

[注1] 以下の記述は，ETSのTOEFLについてのオフィシャルサイト及びサンプルによるものです。
(<http://www.toefl.org>)

[注2] ETSによるScore Reportingを略しています。